

system としての問題の性質や国内の諸底流は、それにも拘らず、根深い連続性を保っている。この Nguyen Thai の著作は、特に Ngo dinh Diem 政権への批判として書かれたものであるが、南ベトナム社会の内蔵する基本的な諸問題に対する理解への示唆をもっていると考えるので、ここに紹介することにした。ちなみに、著者は1954年以来 Vietnam Press (official news agency) 政権にあっての総支配人などを務め、1961年末この政権に見切りをつけて米国に亡命した。

本書は六つの章から構成されており、第一章では著者の基本的命題である「南ベトナムの政治的危機は行政的リーダーシップの問題である」という点が定式化される。かれはいい切っている：南ベトナムでは、政府と人民の関係こそが米国の援助によって支援された反共産主義戦略プログラムの成功あるいは失敗を決定するであろう、と。〈Diemocracy〉のもっている問題は internal かつ domestic なものでその administrative leadership の失敗が政治的危機の根源であると理解するのである。

行政上の問題の一半は、しかし、伝統的・植民地的社会の官僚制や行政組織の望まれざる遺産であるし、加えて戦時という特殊事情の結果でもある。この分析が第2章のテーマである。patronage, nepotism, corruption, opportunism が行政組織に浸透し、技術的・行政的堕落を招く一方、有能な人材を一致して政府に動員することに失敗し、大衆の支持は失われる。

第3章から第5章までの三章は専ら Ngo dinh Diem 体制の解剖に当てられている。そこでは清廉潔白で情熱的な nationalist leader である Diem の権力への抬頭とその体制が示したいくつかの矛盾が明らかにされる。著者は、〈成功的な民族的・革命的指導者が必ずしも有能な行政家ではない〉という仮説を検証しようとしている。第3章では、Diem 体制の ideology とその実践が、第4章では、〈聖家族〉のメンバー達の分析が、そして第5章ではそういう支配のもたらした行政的破綻が指摘される。この三つの章は、量の上からも全体の2/3を占め、著者の特殊な立場も手伝って Diem 政権の内側からの鋭い分析になっている。特に第4章は〈The Invisible Government〉この種のものとしては記録的な価値をもっているといえよう。

第6章は結論の項であるが、全編の分析が基本的にはそうであったように、アメリカ型の組織論——leg-

itimacy vs. effectiveness——の西洋的合理性に溺れ過ぎてはいないかという懸念が残る。従って Diem 体制の分析評価は今少し、根深い社会の底流から行なわれるべきであるという気もする。その点で、この書の情動的要素をより高く買っておく。(中野寿一郎)

Frances A. Bernath: *Catalogue of Thai Language Holdings in the Cornell University Libraries through 1964*. [Data Paper: Number 54] Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, Ithaca, New York, 1964. v + 236p.

祝儀・不祝儀の「引出物刊行物」、すなわち「Nangsū Čhaek」が、タイにおける過去の serious な出版物中の重要な部分を占めて来たという事実は、これ迄意外な程に人の注意を引かなかった。「Nangsū Čhaek」とは文字通り「配る (Čhaek) 書物 (Nangsū)」であって、それが印刷される因縁となった何かの儀式——たとえば葬儀、加寿の祝儀、記念式典など——に偶々列席しその頒布を受けた者以外の目に触れる機会は誠に少なく、一般にはその出版の事実すら知られぬままに死蔵され遂には散佚してしまう場合が多かったものと思われる。「Nangsū Čhaek」が一般読書人の物となり得る現在ほとんど唯一とも言える場所はバンコクの王宮前広場 (Sanam Luang) の一隅に列をなす街頭大書店の Kiosk である。足まめに根気よく Sanam Luang へ通うことがタイの出版界の消息通となるための必要条件である理由はここに存する。今日までタイ語図書の出版目録が殆ど現われなかった原因、4921点の文献蒐集に前後十数年を費し、その目録が未整理のままでさえ優に Data Paper の一巻を飾る価値のある理由はタイの出版事情のかかる特殊性を背景に理解される必要があろう。

Lauriston Sharp, William Gedney 両教授の協力で始められた。Cornell 大学のタイ語文献の組織的蒐集事業が、同大学図書館の手に引継がれ今日も着実に進められているということは聞き及んでいたが、本書の出現によってその蒐集の全貌が公にされたことはタイ研究の進歩のため誠に喜ぶべきことである。幾多の困難を克服し先駆的なタイ語文献の蒐集事業をここまで育て上げた関係者の努力にあらためて敬意を表

すると共に、この「目録」がやがて *annoted bibliography* へと発展することを期待して止まない。

本書はおそらくかなりの長期に亘って作成された図書カードを著者名にしたがいアルファベット順に配列しこれを写真版にしたものと見られる。並べられたカードの記載方式に若干の不統一が見られるのはこうした理由によるものであろうか。

本書は著者名の表示に際し、Chū と namsakun とを一つの複合単位として把える方式を採用しているが、これはタイ語の慣用に沿った試みとして推奨に価しよう。(屢々 *namsakun* を surname として扱う方式が見られるがこれは実情に合わない: Sarit Thanarat は Čhompon (元帥) Sarit であって Čhomphon Thanarat と呼ばれることはない。)

また葬儀の際の nangsū čhaek を cremation volume と表示し、これが故人の略歴を含むか否かを一々明示してあるのはこれを WHO WAS WHO として利用する者にとって極めて有益である。

ただタイ文字のローマ字転写について言えば、母音ではじまる chū を略記する際の便を考えたあまりに glottal stop を一々 q で表記してあるのはいささか繁雑である。(Qamerica=America) 編者の意図は、タイ語式に S. の代りに Sq. とすることに踏み切ることによって無理なく実現するのではあるまいか。

いずれにせよタイ語文献利用者の指針として本書の果す役割りは大きい。今後これにならって各方面のタイ語文献 collection が公開され、それらのすべてが網羅的な総合文献目録へと集大成される日の一日も早くからんことを期待したい。(石井米雄)

R. K. Sprigg: *A Comparison of Arakanese and Burmese on Phonological Formulae: Linguistic Comparison in South East Asia and the Pacific*. School of Oriental and African Studies, Univeresity of London, 1963. pp. 109-132.

ビルマ語方言の内でも比較的古い形を残しているとか、発音が綴字法に忠実であるとかいわれている「アラカン方言」については、今までにも、緬・英両文による報告が幾つかあった。しかし、アラカン方言とは具体的にどのような構造をしており、標準ビルマ語との間にどのような対応関係をもっているのかという事になると、残念ながら従来文献だけで十分な理解が

得られるとはいいい難い状態にある。

この論文の著者は、実際に informant を利用して、まずアラカン方言の音韻体系を明らかにし、ついで標準ビルマ語との間の対応関係を、Prosodic Analysis を用いて示している。著者は、アラカン・ビルマ両語を Tone, Quality, Voice Quality, Labialization の4視点から、各々2種, 3種, 2種, 5種に分析し、対応関係を設定した。ここで認められる規則的な対応系列は、Tone の1型と2型, Quality の z, m, k, Voice Quality の g と g (=non-g), Labialization の s, c, ə, f, b である。この内、z は -V#, m は -Vη, k は -V? を示し、g は従来 Creaky Tone (J. A. Stewart), Tone III (W. Cornyn, R. I. Mc David), Tone 9 (R. B. Jones) 等と称されているもの、S は spread, c は centralized, f は fronting, b は back vowel を含んだ各 syllable を意味する。

以上の例を見てもわかるように、この論文には著者独自の略語が頻繁に用いられているので、あらかじめ各略語の概念をはっきりつかんでおかないと、全体を理解する事が容易でない。この事は、前作 *Junction in Spoken Burmese* (1962) についてもいえる。分量の割には、内容が難解だといわれるゆえんである。

紙数の大半は、b, s, ə, f, c 各 Syllable の分析とその対応関係とにさかれているが、内容としてもこの部分が一番充実しており、各節毎に詳細な exemplification がある。殊に、アラカン方言の特徴ともいえる Rhotacization に関する説明は、群書の中で類を抜くといっても過言ではなかろう。ビルマ語に関心をもつ人たちに一読をすすめたい。

ただ難点をいえば、この論文の目的が、Phonological Formulae の作成におかれている以上やむを得ない事ではあるけれども、言語史との関連性が全くみられない点である。また、アラカン方言は、標準語には認められない特異な語彙をもっている事でも有名であるが、それらの考察も全く除外されている。標準語の動詞1002に対して、アラカン方言が667しか対象とされていない事も、はじめから対応成立の確実な語彙のみに焦点を絞ったからにはほかならない。いわば、定形化し易いものだけをとりあげて、その他の扱い難い剰余部分は、完全に切り捨てたという感じである。

(大野 徹)